

Presented by おぼんじゅーる

堅洲の神刃

～katasu no sinba～

18歳未満の購入・閲覧を禁止します



我は何者だ……。

ただの……刃……か。

ならば……「物」……なのか。

「堅洲の神刃」

2022年02月Ci-enにて公開

2022年05月初版発行

発行者：おぼんじゅーる/わのおねぞ

サークル：おぼんじゅーる
<http://obonjour.ninja-web.net/>



Ci-en (支援サイト)
<https://ci-en.dlsite.com/creator/810>



この作品はフィクションでありファンタジーです。

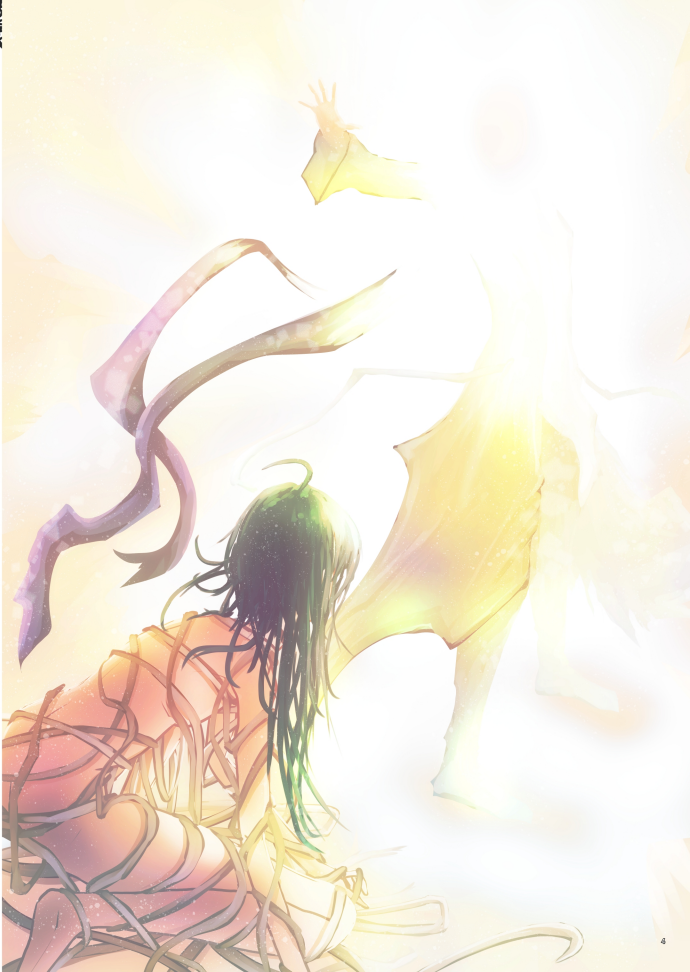
実在する人物・地名・団体・神話等とは一切関係ありません。

神話や伝承にない設定も盛り込んでおりますので絶対に参考にしないでください。

無断転載禁止・無断翻訳禁止・複製禁止・動画サイトへの投稿禁止。

本書によって発生したトラブルにつきまして、作者は一切の責任を負いません。

当作品を機に古事記・日本書紀等に興味を持っていただければ幸いです。



1

—— 眩しい。

閉じた眼を開けよと言わんばかりの輝きが目の前にある。

眠っている場合ではない。

今すぐ起きろ。

起きて立ち上がれ。

最高神の御前なのだぞ。

生まれたての子鹿のように震えながらもその脚で地を踏みしめる。

嗚呼……我は………体軀を手に入れたのだな。

細く雪のように白く、生気のない指先。

黒が長い刃だっただけに背は高く、

黒刃故に髪と身に纏うものは漆黒。

誰の目にも触れられぬよう巻かれていた包帯を操れるようだ。

己の身を確認した後、我を見つめる最高神に問いかける。

「……………我を作成したのは………貴様が」

失う事のない輝きを放つ最高神が口を開く。

「私は伊邪那岐………高天原最高神だ」

最低限のことしか話さぬつもりか？

もっと問いかける必要がある。

「では………伊邪那岐よ、我は今からお前の神刃として」

「お前が従うのは私ではない」

「……………何？」

自らが使うために我を造ったのではない………？
ならば一体誰の為に我は………!!!

少し目を閉じ、ふうつと静かに息を吐いた後、
その輝かしい金色の瞳を我に向ける。

そして目を細めながらこう言った。

「私の大事な息子を何が何でも守ってほしい」

根の国

死者の魂が集う死の国。

高天原の正反対に在る場所。

入り口に流れるは黄泉の川。

大切な者の姿を見せ滞りなく死者を奥へ誘う。

川の向こうには荒廃した大地。

ひび割れた部分からマズマが漏れ出ているが。

水のように冷たく触ったものを心から凍らせる。

この地に住まうは根の王に従う魂喰い達。

魂喰い達を狙う高天原の怪物。

根の国の奥にそびえる巨大な城。

統治者で在る根の王とその母が暮らしている。

高天原へ還った前統治者の権限を引き継ぎ、

死者の魂を浄化し地上へ送っている。

我が主は先の高天原の戦いで根を訪れ、
そのまま根の王になる事を任じられるに至る。

根の国・中央部。

「えーと……今日は二体？だっけ？」

綺麗な緑髪を左手で掻きながら難しい顔で怪物の討伐数を
思い出そうとする少年。

我が愛しい主であり根の王・素戔鳴だ。

「ああ、城から此処に至る間に怪物を二体討伐した」

主の問いに答えるのは神刃の役目。

この草種・素戔鳴の補佐としても優秀。

「まだ二体か……一日五体目撃だけどころそら疲れてきたな。

お前にも迷惑かけようからな」

「そうだな、無茶して大怪我でもされたら困ってしまうぞ」

「大怪我……？」

何かを想像したのか、たちまち顔を赤らめる素戔鳴。

「ああ……俺の体躯……まあ……」

そりや……腹が減ったち困るもんな」

我がら視線を逸らす。

やはり以心伝心。

我が思っていることが伝わったようだ。

ここは少し試してみようか。

死者の魂を浄化し地上へ送っている。





「1つ解決法はある」

「何？ あるのか？」

「ああ……」

私の左掌が素戔嗚の顔の横を通り、
背後の岩に勢いよく刺く。
ドン。

「大怪我する前に喰らえば良い」

「!!」

ククク!!この頬を赤らめ困惑している顔!!
酸っぱいではないか!!

心の内が隠せずニヤついた我を見つめる主
ここまででは自然な流れ。
上手く交為に持ち込めれば……。

「どこから食してほしい？」

右の手で緑の髪を撫で、
細くて雪のような指先が紅の頬を伝い、
素戔嗚の赤い唇に触れる。

「唇か？」

少し開いた口先から吐息が溢れる。
急に迫られ触られた。
間違いない主は興奮している

「それとも……」

そのまま流れるように首元を下り、左の乳首の部分に指を滑らせる。

「乳首か？」

柔らかい乳首。布の上からでも分かる。
指先で弄ぶ。

感じているのか思わず目を閉じる主。

「んっ……」

指先が固い感触を感じる。
私の指先でもう勃起しているな……愛らしい。

この状況が嫌ではないのだろう。
拒否のなら今頃ぶん殴られているはず。

しかしここまでの反応は薄い。

もっと下半身をこ所望か。
乳首から離れた指先はヘソをなぞり、
骨盤・股間……柔らかい膨らみへ到達。

「オチ●ポか？」

「っ……?!」

違う。
この反応ではない。

「此処でもないなら……」

尻のほうに手を滑らせ……。

「ふあっ……!!」

「裏門……か?」

「んっ……!! やっ……!!」

……この反応!!

「此処が良いか?」

すきさま下衣、下着の隙間から指を這わせ割れ目をなぞり、穴を刺激する。

「だ……だめっ……!!」

主の体軀が震える。

やはり此処だ。

裏の門を離れてほしいのだ。

私も主の期待に応えねばなるまい。

岩を押し付けていた左手を己の股間に戻し、刺激する。

「良いぞ……少し待って……くれればすぐにでも立ち上が……!!」

主の両の手が我を強く押す。

裏門を刺激していた右手は主から離れてしまう。

一瞬の隙を突いて拒まれた。

さすが我が主……油断を見逃さない。

「……何だ? 指でも良かったか?」

「はっ……!! ち、ちちち違う違う違う!!」

「……(……)んなどこで体軀を重ねるなど……」

ダメに決まってるんだろ!!」

「……すまん、草薙。素戔鳴にも分からぬのだ……」

高天原の素戔鳴は根に響ちて変わってしまった。

此の地で母上に会つて愛や熱を欲していたのだが、満たされてしまったのかな」

「……刃の我には分からぬ心よ」

完全に萎んだ。

「交為が出来ない訳ではないのだ……」

発情出来るよう努力はする。

……お前は素戔鳴にしか触れぬからな。

俺がなんとか満たしてやらないと」

申し訳なさそうな主の顔。

「……素戔鳴」

なんとかしてやりたい……
だが、どうすれば良いのだろうか。

何だその顔は……。

頬を赤らめて股間を押しさえて一生懸命否定する姿。

嗚呼……とても愛らしいなあ!!我が主!!

「怪物の気配はしないぞ」

「た、魂喰いに見られたら……!!」

「我が結界を張り魂喰いには見えぬようにすればいい」

「っ……!! と、とにかく今はダメだ!!」

「私は腹が減った。喰わせろ」

股間も立ち上がりつつある。

今こそお預けなどありえない。

「今はダメだと言ったのが聞こえないのか?」

「では何処かに移動すれば良いか? 何処なら良い?」

「此処ではない場所だ!!少なくとも……城の外では拒むぞ!!」

これは溜息、完全に拒否の姿勢だ。

「何をカッカしておる……素戔鳴、神は不思議だな。

高天原にいた頃は女を見るたびに発情して腹を空かせ、

我を相手にしてたくせに……」

む……少し苛立っているな。

皮肉混じりになってしまった、草薙、反省。

「それは高天原での話だ!!今は違う!!」

「今はそんなに腹が空かぬのか?」

「あ……ああ……何故だろうな……不思議だ」

「私の大事な息子を何があっても守ってほしい」

そう命じられたのがもどろい前だったのだろうか……。

思い出せないくらい付き合いは長いということだ。

故に知らぬものはない。

私は素戔鳴の良いところも悪いところも全てを理解……。

いや……それは言い過ぎた。

素戔鳴とて触れられたくない場所はある。

神格の内側、魂の底、荒御魂の深淵。

素戔鳴自身を形成する根源。

誰にも見られてはならない。

我が最大に警戒すべき部分。

素戔鳴が変わってしまったのはあの部分に変化が生じたのだからだろうか。

……我が何らかの侵入を許してしまったのか。

も………気をつけねば。

取り返しのつかぬ領域に踏み込む前に。

「ふう……。これでまた一歩、根の平和に近づいたな」

「……素戔鳴」

「ん？ どうした？」

「腕を見せろ」

「え？ 腕……？」

主の右腕の甲。

傷は小さいが血を流すほどの怪我をしていた。

「うげっ?! いつの間に?！」

「やばりな……」

すぐに触手を避けつつもりが当たっていたのかもしれない。

すぐに我が治療してやろう」

「こんぐらい平気だろ!! 洗って包帯巻いとときや明日には治る」

「我が治療する!!」

声を荒げるつもりはなかった。

「な、なんだよ……？」

そんなに大した怪我じゃない大丈夫だってば……」

「私は伊邪那岐と約束をしたお前を守らねばならぬ。

そのとき怪我も刃に一つお前の命を削る可能性もある」

私は素戔鳴が心配できなかった。

「素戔鳴は大変な奴だ……」

迷惑そうに左手で頭を掻く。

「よっしゃ!! とどめだ!! 行くぞ草薙!!」

先ほど遭遇した怪物の前に余裕と言わんばかりの笑みを浮かべ、神刃の姿の我を振りしめる。

素戔鳴が我を振りしめる。

なんと心地が良い瞬間。

我々は繋がっているのだ。

「ククク!! 調子が良いぞ!! 一撃で仕留めてやる!!」

交差が出来なかつた腕に刺さった。

とさりの一撃を肩舞ってやろうぞ。

己の窮地を悟つたか、傍若無人に触手を伸ばす怪物。

しかた我が主の敵ではない、怪物の頭上へと飛び上がる。

「くっらえ!! 得衆得國!!」

振り下ろされた神刃から放たれた漆黒の炎は怪物の額を貫き、内部から豪快に焼き上げる。

「……草薙の……」

断末魔が根に響く。この音が住民達に安らぎを与えるのだ。

爆破するが如く怪物の肉片が四方に飛び散る。

悪臭漂う異物が我が主に飛ばぬよう我が境界を張る。

「まあ俺の心配してくれているのはすごく嬉しいよ。

帰って治療してもらおうかな!」

我が気持ちを知り嬉しのである。

主ははびきりの笑顔を見せてくれた。

「ああ!! 早く帰ろう!! 我が主!!」

早く帰って今度こそ……!!!

根の城・内部。

門をくぐり、城の中に入ると玄關は薄暗い達と小さい部下達が交流する場。さらにその先の長い廊下を進む。

奥の方居間の近くに主の部屋はある。

ソファ・ベッドと小さな机だけを置いた特になにもない薄暗い室内。窓も扉もない。高天原にあった仕置き部屋にそっくりだ。母に会いたいたと喚き散らしたあの部屋に。

治療を終え、包帯を巻き終える。

大した触手ではなかった。ただ、触手で付いた傷ではないように見える。

「おう、ありがとな!!」

「乳など言わない……」

我が一瞬でも油断した故に傷を負わせてしまったのだから

「何言ってるんだ、気にすなよ!! 怪我の功名だぞ!!」

我が主は何と優しい王なのだろうか。

決して我を責めず、悪意のない無垢な笑顔で安心させる。

「……ふっ。素戔嗚が明るい性格で助かる」

「暗くなって良いことないからな。」

……父上や姉上、黄泉様に見られても良い素戔嗚で在りたいのだ!!

弾力のあるソファ・ベッドの上で

身動きひとつ取れぬまま性えた瞳で我を見つめる。

さながら蜘蛛に囚われた餌というところか。

さて……まずはどこから解けてやらうか。此処が良いかな……

上衣の間隙から指を這わせ、ヘソの当たりを触る。

「はっ……あ……」

急に触れられて驚いたのであろう。

全身をビクつかせ、吐息を漏らした。

「……まだ腹を触っただけぞ!!」

我ながら意地悪だな。

「や……やめろ……これ以上は……」

頬を紅色に染めて我を睨みつける眼。

「これは良い反応、思わず舌舐めよう。」

「これ以上は……何だ? ……言ってみろ」

「こ、これ以上は……」

なんと悔しそうな顔をする!!

もっと虐めたくなるではないか!!

「ふっ……!!」

「ふっ……!!」

「私は刃ぞ、邪魔な布などを断つてくれる」

「ついでに下衣も取っつしまえ。」

何度見ても飽きぬその笑顔。

体軀の内部が熱つてくる。

「相変わらず愛らしいいな……」

静かに主の頬を触る。

「可愛い……か? カッコ良いって言ってほしいのだが」

「まだだ。」

困らせるつもりはないのだが……。

「困惑している顔も良い……」

堪らなく嘸る。

「へっ……え!!」

我が包帯が素戔嗚の四股を拘束する。

もう迷がさぬ……我が主!!

「お……おい……草薙?」

「先程の約束を忘れたか? 我は腹が減ったと申した。

今は城の中……喰っても良いな」

「ひっ……?! ちょ……草薙!!」

抵抗しても無駄。

我が包帯はそう簡単には斬れぬ。

この草薙が満足するまでは逃げられぬと思え。

……痛……しないで」

素戔嗚自身も自らが置かれた状況を理解したようだ。

「……痛……しないで」

ついに観念した。

顔を背け、顔を真っ赤に染め恥じらう。

「まあまあ……怖がるな。少し私の欲望を満たすだけさ」

そう言っつて懐から出した小瓶。

中には主の大好きな蜂蜜が……。

トロトロトロ……

一滴、二滴……おつと、傾けすぎた。

「やっ……冷たい!!」

「冷たさなど忘れるくらいすぐに熱るさ……」

剥き出しの上半身の上を滑るように白い手のひらが液体を塗り込む。

「んっ……は……」

早いでもう効いてきた。

さあ、従順な私の玩具よ……たくさん哭きたまえ。

白い指先が素戔嗚の乳首をはじく。

「ぬあっ?!」

まるで壊れた楽器だな……少し爪弾いただけで不協和音を奏でる。

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

「ぬあっ?!」

硬い乳首を更にこねくる。
「あっ……はあっ……」

「おお……私の指先が良いか？ ん？」

「いや……うっ……!! 俺の体躯で……遊ばないで……」

「まだ抵抗するののか？」

「もっとなめてほしいよだな!!」

「何故？ こんなに体躯が触ってくれと震えているではないか？」

「乳首はもう良いな。次だ。」

「頑固な息子だ……父親譲りだな」

「次は願ってやろうかな……」

「もっとなめて赤く染めた目を眺めていたい。こんなに近くに主を感じられるなど我は幸せの絶頂を迎えようだ。」

「あ……あ……顔近い……何……して」

「その口を調教してやろうと思っただけ」

「調……きよ……んっ!!」

質問はさせない。

ただこの幸せな時を心から楽しんでほしい。

柔い唇と私の唇が触れ合う。

「はっ……ああっ……」

私の舌が主の口内へ強引に侵入。

素直な舌が我を受け入れ、舌先と舌先が絡み合う。
やばり……嫌ではないのだな。

「はあ……あ……んっ……んっ……」

「良い艶声だ……唆るぞ……素直な舌」

しかし油断するな。

舌しばかり意識を向けると何をされるか分からぬ。

例えは……この無防備になった乳首を急に捏ねると……。

「んやあっ!!」

「瞬で体躯が反るほどの刺激。」

「ククククク!! もっと声を聞かせておくれ!! 我が愛しの主!!」

「はっ……はっ……あっ……ちくびっ……やら」

「此処が良いのか？」

「いやっ……はあっ!! ああうっ!!」

「やめてやめてっ……!! いやあっ!!」

「乳首好きか?! 好きなのか!!」

「すきっ……!! すきいいい!!」

「すきのお……ちくびだしいゆきいいい!!」

「おお……本音を言ってくれた。」

「どうした？ 腰が善がっているぞ!! もっと練習してほしいだろ？」

「……はっ……はっ……はっ……こしゅじんしゃま」



「そんなに我が好きか？ 愛しているのか？」

「すきのお……しゅじんさま……しゅきだいしゅき……。」

「もっして……おねがいしませう!!」
なんと愛らしい声だ……!!
その際い聞き入れてやろう!!

もっ……もっ……と乳首を!!

「ああっつ!! いっちゃん……オチンポ……おかしいの!!

熱くて……!! ああ……ああああ!!」

両の乳首を弄られ呼吸は荒く、瞳に涙を浮かべ顔を歪ませる。

もう我慢の限界か。

「はっ……でる!! あっ!! いやああああああ!!」

ブジュブジュ!!

股間から伸びた棒の先から
不透明な白いドロドロした欲望が流れ出る。

「はあ……ああ……出ちゃ……ああ……いやあ……」

ちくび……もう……いや……やらあ……」

欲望が出ようと乳首を弄る事は諦めぬ。

果ての向こう側へ行こうぞ。

「どうして拒む？ 乳首大好きなんだから？」

それとも違う場所を弄ってほしいのか？」

「ちがう………ばしょ……」

「もっ……願え、叶えてやるぞ」

コリコリコリ。

「ああっんっ……んっ……あつ……!! はっ!!
すきのおの体ね……しゅじんさまのものお!!」

いいぞ!! いいぞ!! 愛らしい!!

褒美に耳も攻めてやろう!!

「はっ……」

「んあつ!!」

突然に耳に吐息をかけられ、両の目を見開く。

「では好きに觸っても良いと言ったことだな？」

「んうっ……痛いのは……イヤ」

涙を浮かべた眼が我を覗む。

「ああ……痛くはしないぞ。気持ちよくしてやるだけだ」

私の包帯は自由自在

あつという間に縛っていた脚を強引に広げ

尻の門を剥き出しに出来る。開門開門。

「ふあつ………そんな……恥ずかしいところ……見ないで」

「私は此処が好きだ………素爰鳴」

媚薬の付着した指先で門をこじ開ける。

「はっ……!!」

当然の反応。

そして私の指と分かったのか、

柔くなった門はどンドン受け入れていく。

「な、なんで……こんな汚いところ……」

「締め付けが良いからだ……」

「締め……付け？」

「私の懐刀も十分硬くなってきたようぞ」

「懐刀……」

勢いよく、門から指を抜く。

ヌボッ……」

「っ……!!」

私の懐刀を鞘から抜く。

新たな鞘へ差し込むために。

「先ほどは入れ損ねたが……もう遙がさん

照準を定め……」

「さあ……素爰鳴……もっ……と突いておくれ!!」

「一気に突く!!」

グンッ

「ふんはああああああああ!!」

「ああああああああああ!!」

「おっ!! おっ!!

良いぞ!! 良いぞ素爰鳴!!

この熱さ……素晴らしき狭さ……!!

気持ちが良い!!

「あつ!! あつ!! ああつ!!」

まるで我のために造られた鞘のようだ!!

心算が良い!! 永遠にこのまま封印されても良いと思っくらいに!!

「ふあつ……ああつ!! はあつ!!」

「お前はどうか!! 素爰鳴!! 気持ち良いか?」

「きもち……っ!! いい……っ!!」

「出ちゃう………オチンポ……出る!!」

「一緒にイこうぞ!! 愛しい素爰鳴!! ふんっふんっふんっ!!」

「ああつ!! やめて!!

イイとこ……擦れる!! もうダメ!! 出る!!」

「良い!! 我也出す!!」

「ひゃああああああああ!!」



6

「はあ……はあ……、
もう……じゅうぶんした……だろ……はなせよ」
戒めを解いてもらえず頬を赤らめたまま我を睨む。
本当に怒っている。

「何を言う、素戔嗚はまだ始まったばかりだぞ……」
ベッドに座ったままの素戔嗚の背後へ回り、
背中から肌を這わせ手を伸ばす。

「お前の頭が湧けるまではこのままで思え……」
「ああっ……ひゃあん!!」
ちくびとオチ●ポ……よりほうはらめええ!!
お気に入りで分かったのだ。存分に刺激し、調教するに限る。
「すぐいっちゃうらうらう!! あああああああああ!!」
「無くなるまで搾り取ってやる……!!」
お前に性愛を思い出させてやりたいのだ!!」
再び硬くなった懐刀を門に突き立てる。

「っ……あ?!」
急な音が入りに門番も驚いた事だろう。
だがすぐに我々がいることも簡単に奥へ案内してくれる。
「私は素戔嗚の守護職!! 伊邪那岐との約束を果たす!!
侵入者からお前を取り戻してやる!!」

素戔嗚を後ろから粗み伏せ、四つん這いに押しさつける。
この角度、この角度で鐘をつくのだ!!

「ふんふんふんふん!!」
パチンパチンパチンパチンパチン!!
柔らかな尻と私の股が弾き合う軽快な青色。
先程の不協和音が囁のように主の吐息と和音として重なる。

「もう……や……オチ●ポ……壊れ……」
「目を覚ませ!! 素戔嗚!! 高天原の己を思い出すのだ!!
お前が求め我が狂ったように騒ぎやめたあの頃を!!」

「はあ……あ……あゝ」
腰から崩れ落ちた我が主。
小さくなった棒の先から少量の白濁液が垂れる。
本当に搾り取ってしまったようだ。

「素戔嗚……素戔嗚……私の素戔嗚。私の愛しい……主」
無理強い良さを嬉しいような、
無理強いをしてもいい申し訳ないような、
複雑な気持ちを抱いたまま主を抱きしめる。
その濡れた瞳で我を見つめよ。

「……素戔嗚？」
目を閉じたまま動かなくなっている。

「素戔嗚……どうした？返事をしろ。素戔嗚？素戔嗚?!」
「いかん……いかんいかんいかん!!
本心に壊れてしまったのかん!!」

しかし死んではいない。
根の王故に死ぬ事は出来ぬ身だ。
我から逃れようとした意識が
体躯の何処かに引っかかってしまったのだろうか。
取り戻さねば……素義鳴を起こさねば!!

続きは本編にてお楽しみください!!

収録文字数約30000字ノベル形式72P・挿絵フルカラー・書き下ろし付

シヨタ拘束触手



愛しい王様我が守る所

名をなす……助けを